

陸稲の雑草に対するペンディメタリン剤の 除草効果とその応用

1. 試験のねらい

いわゆる、マイナー作物を栽培する地域が増えているが登録された適当な除草剤がなく中耕・手取り除草等の省力化ができずに問題となっている。そこで比較的栽培面積の多い陸稲について適用可能な除草剤を検討した。

本県の防除基準で陸稲に登録のある除草剤は播種後処理剤がシマジン・ロロックス・サタンバーロの3剤。しかし、どれも除草効果の点でやや物足りないため、どうしても生育期に手取り除草に入るかスタムを散布せざるをえない状況であり、除草および中耕作業を省力化すると共に、ドリル播など栽培法の改善に道を開くため除草効果の高い薬剤を選定するとともに無中耕栽培の可能性について検討した。

2. 試験方法

処理内容は下表のとおり。

○平成元年（播種日：4月25日）

区名	施用量(aあたり)	有効成分の種類
サタンバーロ	80ml	プロメトリン5%+ベンチオカーブ50%
トレファノサイド	30ml	トリフルラリン44.5%
ゴーゴーサン	40ml	ペンディメタリン30%
コワーク	90ml	トリフルラリン14%+プロメトリン6%
ゲザガード	20ml	プロメトリン50%

○平成2年（播種日：4月27日）

区名	施用量(aあたり)	有効成分の種類
サタンバーロ	80ml	プロメトリン5%+ベンチオカーブ50%
ゴーゴーサン	40ml	ペンディメタリン30%
サタンバーロ+スタム	80ml	DCPA35% 体系処理
ゴーゴーサン+スタム	80ml	DCPA35% 体系処理
無処理		
手取り除草(60cm畦のみ)		

注. 畦幅 2水準 60cm・30cm
スタムは6月5日茎葉処理

場所は農試本場畑（表層多腐植質黒ぼく土）。耕種概要は供試品種：トヨハタモチ、処理日：播種当日土壌処理、栽植密度：畦幅60cm×播幅10cm、播種量：0.4 kg/a、施肥量（kg/a）：基肥N 0.6 P₂O₅ 1.0 K₂O 0.8、追肥（平元年のみ）：中耕・培土時N 0.2×2回、中耕・培土（平元年のみ）：中耕5月25日・培土6月23日

3. 試験結果および考察

- (1) 残草量 サタンバーロ乳剤に比べ、ゴーゴーサン乳剤の効果は高く、慣行のサタンバーロ+スタム体系と同等以上の効果である（図-1、2）。
- (2) 葉害 ゴーゴーサンによる葉害は認められない。
- (3) 葉重および精粒重 ゴーゴーサンは雑草害を受けずサタンバーロに比べ葉重および精粒重とも多い。
- (4) ドリル播栽培を前提とした30cm畦幅で60cm畦幅より多収を得られる（図-3）。

以上より、ゴーゴーサンは効果極大で手取り除草および中耕作業を省くことができると共に、ドリル播等の播種様式も採用でき、省力・多収栽培が可能となる。なお、ゴーゴーサンは麦等に登録済だが陸稲に対しては未登録であるため現在メーカーに登録取得を要望中。

4. 成果の要約

ゴーゴーサンは陸稲に未登録であるが、慣行のサタンバーロ+スタム体系と同等以上の効果で、手取り除草および中耕作業を省くことができると共に、ドリル播等の播種様式も採用でき、省力・多収栽培が可能となる。

（担当者 作物部 湯沢正明）

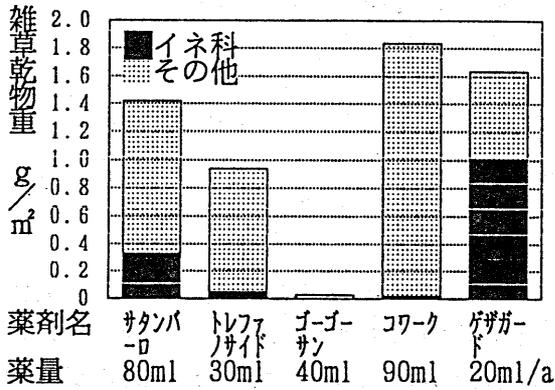


図-1 除草剤の種類と残草量の関係 (平元年)

注)

(1) 図-1 は処理後30日調査

(2) 図-2 は土壌処理後150日調査

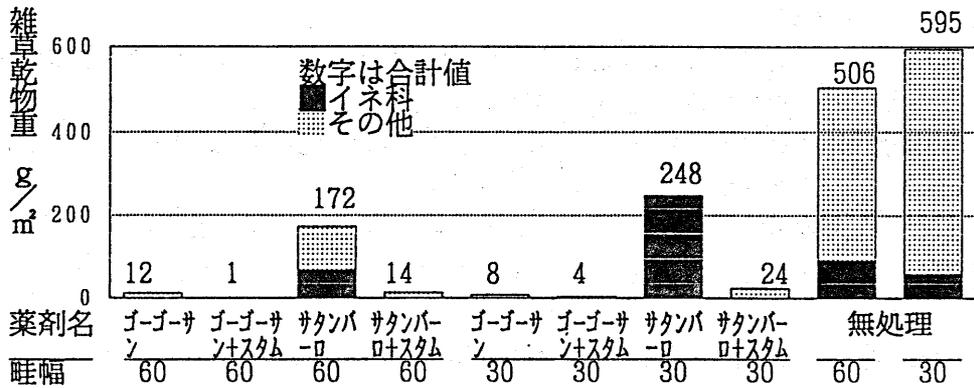


図-2 除草体系・畦幅と残草量の関係 (平2年)

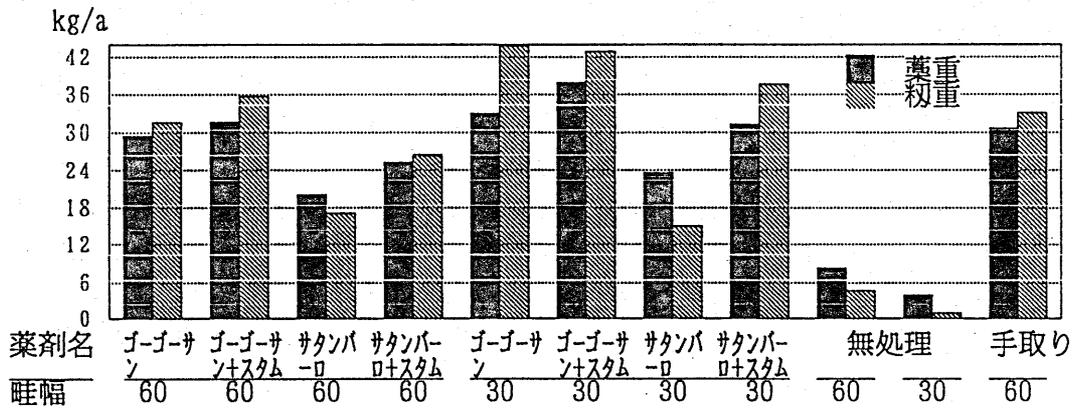


図-3 除草体系・畦幅と薬重・籾重の関係 (平2年)